

いきいき山梨ねんりんピック2011

# シルバー俳句大会 入選作品集



◆開催期間 平成23年6月9日(木)～6月13日(月)

◆会場 山交百貨店 5階催事場

主催 いきいき山梨ねんりんピック実行委員会  
主管 社会福祉法人 山梨県社会福祉協議会

# 南 俊郎 選

## ■ 特 選 ■

年の夜の老のすさびの戦うた

西桂町 勝俣幸夫 九二歳

滝行の生絹の飛末まといけり

南アルプス市 伊藤喜代子 八六歳

笹鳴が笹鳴を呼ぶ雑木林

甲府市 金丸環 七五歳

落ち椿早瀬を前にたじろぎぬ

南アルプス市 村松たかみ 七四歳

梅漬けるもう先の無き夫との日

南アルプス市 荻野重美 八〇歳

## ■ 秀 作 ■

うすのろと言はれ山芋掘り上手

富士吉田市 渡辺武人 六七歳

日脚伸ば上がり框に画布置かれ

北杜市 仲沢やよゐ 七二歳

初釜や背筋のばして座に着けり

甲府市 神宮寺恵美子 八五歳

朝寒やすらりと昨日遠ざかる

上野原市 長田重子 七一歳

花筵立つも座るもどっこいしょ

西桂町 重田秋子 七六歳

芽おこしの風にうなれる雑木山

早川町 大野和子 七二歳

つまづいて土の温みを知りにけり

南アルプス市 河西重徳 八一歳

土手燦々雉子十羽の子を連れて

韮崎市 大内幸 八二歳

病む友の明るき覚悟梅の花

北杜市 金子至 六七歳

桜東風石屋に石の大黒さん

笛吹市 松山淑子 七〇歳

## 【評】

有季定型（季語を必ず入れると同時に十七音でまとめる。）は、作句の必須要件です。これなくしては、作者の思いは伝わらないし、この作品自体も俳句とは呼べません。今年は何時になく無季句が多いように感じたので調べたところ、総数の八・四二%に達しており、驚いています。これでは審査対象から洩れてしまう恐れがあるので確認の上、提出して下さい。

### （特選句）

○一句目 その年の最終の時間という感慨に浸りながら、ふと口ずさんだのは軍歌などの類いの戦うただった由。戦時の人間はここまで餓いならされたものかという自嘲の念と哀しみが思われます。

○二句目 滝に打たれている行者の飛沫を生絹（すすし）と見立てた感性のよろしさあるいは比喩の巧みさが実体以上に美しく再現されました。まだ練らないままの生糸の織物の白さ清らかさが思われます。

○三句目 冬の鶯の鳴き声は「チャツ、チャツ」というばかりで、子鶯が一人前の鳴き声を目指して発声練習しているのだと誤認されています。それが笹鳴といわれお互いに催促されるように鳴き合うのです。

○四句目 川の流れの中心が本流であり早瀬ですがその両側は早瀬から遠のくので緩流又は淀んでいます。そこに落椿が浮かんでいるのですが、恰も早瀬を恐れたじろいでいると観たのでしょうか。

○五句目 一読して人生という営みの辛さ、悲しさが胸に迫ってきます。夫婦の別れはいつかは来るもの。この句ではそのどちらかが余命が少なくなっている、つまり「もう先のなき」と達観しているのが辛い句です。

堤 高嶺選

■ 特選 ■

屋根石を飛び交ふ木曾の寒鴉

甲府市 安江 建 九〇歳

苗札に一枚まじる幼な文字

甲州市 藤森 正男 九一歳

春泥をつけ往診の夫婦へる

甲府市 若林 喜久江 八九歳

滝音の途絶えしままに寒に入る

早川町 保坂 紀恵 七一歳

振り向ひて夫の手を引く春の泥

富士吉田市 萱沼 美保子 六六歳

■ 秀作 ■

初旅や家族揃いしこと喜し

富士吉田市 中村 すま子 八五歳

蒟蒻をさらす寒水汲にけり

富士川町 深澤 めみ子 七四歳

ひと箸に芹の香りのひろがれり

韭崎市 山村 満代 七八歳

風花のひとひら止まり長寿眉

富士吉田市 渡辺 合子 七七歳

母の忌の墓標に重き春の雪

市川三郷町 望月 秀子 七七歳

紙干すや雲足早き空仰ぎ

甲府市 上坂 多美也 八一歳

旅の地図たたみ直して春惜しむ

上野原市 天野 としゑ 六六歳

一と雨のありて落葉の地になじむ

甲斐市 湯本 良子 八〇歳

雨しみて芽吹く唐松山匂ふ

北杜市 櫻井 弥生 八〇歳

病みぬいて杖がたよりや山笑ふ

甲府市 武井 静次郎 九三歳

【評】

季語の本質をしつかり把握して使用することが大事です。つけ足りの季語は不可である。

(特選句)

○一句目 木曾の寒鴉の実景が明確な句である。(屋根石のある家並の町)

○二句目 幼が手伝っている苗札書の様子が鮮明。

○三句目 往診も徒歩でしている医師のようだ。

○四句目 滝音のとだえてより寒に入ったとの把握が的確な俳句。

○五句目 連れ立つ夫を気づかう意が鮮明です。

# 井上みどり選

## ■特選■

屠蘇重ね使ひ古りたる夫婦箸

富士吉田市 小野 ウタ子 七五歳

春を待つ少年高く絵馬を吊る

甲府市 遠藤 春江 七三歳

味噌づくり指南の八十路婆忙し

甲府市 石川 昭三 八三歳

老鶯や富士へ椅子向く峠茶屋

都留市 高部 せつ子 七六歳

余震あり墓域を渡る蝶の恋

甲州市 土屋 明 八〇歳

## ■秀作■

卒寿なる叔母の薄紅初鏡

富士吉田市 宮下 まさ子 七九歳

日脚伸ぶ五重の塔の屋根の反り

南アルプス市 長沼 元江 七四歳

這ひ這ひの子の瞳透きたる吊し雛

南アルプス市 今井 もとゑ 八一歳

草庵に日蓮しのぶ苔の花

身延町 近藤 葉月 七四歳

喜寿の旅湯宿に煙る花時雨

甲府市 桜田 茂雄 七八歳

春雨や秘仏の祠閉じしまま

南部町 佐野 きよ子 八〇歳

寒晴れや湖どこまでも青く澄む

早川町 大野 和子 七二歳

にっこりと児は小さき手に雛抱く

身延町 小林 ももよ 八六歳

大震災被害もたらし春の海

都留市 藤江 俊夫 八四歳

廃校の記念碑温む春の雨

笛吹市 清水 芳丸 八二歳

## 【評】

たぐさんの句を見せて頂き有難う御座居ました。俳句は季語が必要で何句か季語のない句がありました。そして季語の重複です。これはもったいないと思います。それぞれ一考の上、良い句を作る様に希望します。

### (特選句)

○一句目 長い結婚生活、そして幾度正月を迎えた事でしょう。二人の愛が強く伝わります。そしてそろっている夫婦箸。小さい事にも気をつけてこれからも健康で幸であらん事を祈ります。

○二句目 春を待つ少年、そして幸を待つ少年は、一寸でも絵馬を高く吊れば神様がみとめてくれる。そして幸がおとづれて来ると信じていると思えます。どうぞ良い春が来ます様に。

○三句目 今は家作りの味噌は少ないと思います。八十路婆さんの昔とったきねづかで近所の方にも教えていると思います。いつ迄も健康で、持っている知恵を大勢の方に分けてあげて下さい。

○四句目 どの誰が来るかわからない峠の茶屋。富士は真向いにあり四季の富士山はいつでも、ゆっくり見られる様に茶屋の主のやさしさが目に見える様です。雄大な富士を堪能して下さい。

○五句目 人間には思いがけない幸、不幸が待っているものです。それを乗り越えて小さい蝶が自分の子孫を残そうとする恋、不幸に見舞われながらも小さいものにも心をくだく作者の心が伝わって来ます。

■佳作■

女正月襟元冷えし夜道かな

笛吹市 八田 政嗣 八六歳

新しき箸にも慣れて一月尽

市川三郷町 小林 初子 七四歳

松納め裏で陶焼く一戸かな

富士河口湖町 土橋 自江 七九歳

健やかに生かされ傘寿の屠蘇に酔い

富士吉田市 田 辺 茂夫 七九歳

月白の光背めくや菩薩嶺

甲府市 小畑 賢次 七四歳

車椅子押す子も老いて梅かおる

中央市 望 月 幸子 八七歳

早苗のぶ棚田裾ひく八ヶ岳の影

北杜市 松 林 新一 八〇歳

下萌や田の神醒すせぎの音

山梨市 広 瀬 寛一 八四歳

豪雪に家がきしんで耐えている

甲州市 田 邊 国代 七六歳

帰省して父と背中を流しあう

富士吉田市 小野 芦雪(義幸) 八〇歳

雪積る亡夫の遺せし五葉松

昭和町 輿 石 さだ代 九〇歳

稜線の沈む陽追ひて雁帰る

甲府市 佐久間 孝男 六八歳

沈丁花角を曲れば火宅なり

甲府市 仲 沢 克雄 七〇歳

三世代こだまよろこぶ春の山

身延町 望 月 義男 八二歳

土間涼し梁も柱もくろぐると

韮崎市 切 刀 てる江 七七歳

滝川にせかれて早し落椿

都留市 中 野 舜一 七八歳

合宿の麦湯の煮える大薬缶

上野原市 天 野 昭正 七〇歳

濃目にと生きる証の寒の紅

都留市 志 村 よ志子 八八歳

桑の実やかかって甲斐絹に湧きし町

都留市 前 田 智子 六七歳

初音聞き一句を添えて農日記

富士吉田市 渡 辺 合子 七七歳

神杉の闇点々と残る雪

西桂町 権 守 喜代子 六九歳

柚人の鉦研ぐ音や水温む

韮崎市 切 刀 一子 七五歳

雛の間の介護ベッドに寢息かな

韮崎市 宮 澤 繁子 六〇歳

引きしほる横顔美しき弓はじめ

富士吉田市 渡辺金作 七七歳

書き初めは写経と決めし八十路かな

身延町 望月あさ子 八四歳

すこやかに齡重ねて路のおと

南アルプス市 山下恵美子 八五歳

木の芽晴れ待合室の熱帯魚

甲州市 藤森正男 九一歳

晩学の硯に落とす寒の水

笛吹市 田村藤子 七七歳

早速に落味噌作り老の役

大月市 小林秀子 九三歳

D五一の初夏望郷に発つ汽笛

甲斐市 長田ゆきか 七六歳

僧逝きし寺を抱きいて山眠る

大月市 小林嘉道 七三歳

大の字に寝てみたくなる夏座敷

笛吹市 田中昭夫 八四歳

木喰の里に果つる身独活の花

身延町 小林はな子 八二歳

春浅し色の剥けたる左大神

甲府市 青木国雄 八一歳

これよりは何に堪なん寒椿

富士河口湖町 堀内矢枝子 八五歳

甘党の父に供へる草の餅

甲斐市 宮川あいじ 九三歳

花筏鯉の群がり押しあへり

山梨市 二宮庸一 七三歳

受話器取る凍てつく朝の訃報かな

山梨市 斉藤宜雄 八三歳

春の野や薄雲まとう八ヶ岳

北杜市 小林房信 九五歳

孫と渡る桜舞い散る歩道橋

大月市 小俣邦雄 八三歳

妻編みし帽子目深に剪定す

笛吹市 鈴木広明 七七歳

棟上げの槌音響く秋の天

甲斐市 水上恒子 七四歳

春風に吹かれ心を落ち着かず

身延町 青沼貞子 七九歳

沈丁に夕餉の窓を少しあけ

甲府市 梅田登志子 七九歳

春の雪暗きニュースのきのうきょう

甲府市 小宮山よし子 八四歳